

## 資料紹介—庚申塔

民家園の広場の脇に2基の庚申塔があるのをご存じでしょうか。これらは民家園の開館に合わせて、三室の郷土博物館から移管されたものです。

では、庚申塔とはどのようなものなのでしょうか。

庚申塔の「庚申」とは、十干十二支でいう「かのえさる」のことで、60日に一度めぐってきます。この庚申の夜は、人間の体内にいる三戸<sup>さんし</sup>という虫が、人間の眠りに乗じてその罪を天帝に告げるため、その夜眠ると三戸が人の命を短くするとされ眠らずに過ごして長寿を願うというものです。平安時代の京都の貴族に広まった「守庚申」の行事に仏教や念仏などの信仰が加わり、江戸時代には庶民の間にも普及するようになりました。近隣の人々が集まって講を作り、供養のしるしと造立したもので市内でも数多く見ることができます。

庚申塔には、青面金剛・夜叉・猿・鶏などを彫ったもののほか、「庚申塔」などの文字が刻まれたものがあります。民家園に建つ2基の庚申塔は文字庚申塔にあたります。

1基は、もともと武蔵浦和駅付近に建てられていたもので、高さ109cm、幅34cm、上部は山形からなります。正面には「庚申塔」と大きく陰刻され、その下に3行にわたって「是よりゑどみち」と彫られています。右側面には「右ハよのミチ」「沼影村願主 細淵嘉兵衛」、左側面には「うしろハひきまた道」「享香(和)三稔(年)癸亥四月」とあります。



▲享和3年銘・庚申塔

享和3年(1803)に建てられた庚申塔であると共に、江戸、与野、ひきまた(志木)への道しるべの役割も果たしていました。武蔵浦和駅周辺のどこの辻に建っていたのかは定かではありませんが、造立された当時は、人々の往来には欠かせない道しるべだったのでしょう。



▲安政3年銘・庚申塔

もう1基は、元町在住の個人の方からご寄贈いただいたものですが、もともとは三室地区にあったものだといえます。総高101cm、山状角柱からなる塔身の下に、三猿が浮き彫りされた台座がつきます。塔身の正面には浮き彫りの日と月、その下に「庚申塔」と陰刻されています。右側面には「大願成就」「奉再位馬場稻荷大明神」「正一位室曆二壬申正月」「馬場位嘉永六癸丑二月」「雨屋再建天保四年癸巳九月」「三室村馬場組/社主梓治右衛門/大宮宿在八王子産/幼名磯五郎」、左側面には「安政三曆正月吉日」とあります。安政三年(1856)に建てられた庚申塔と考えられますが、「庚申塔」と「馬場稻荷大明神」という普通では考えられない組み合わせの銘文が刻まれている理由は解りません。前年に起きた安政の大地震で倒壊するなど、何か不測の事態が起きたのでしょうか。ここでは触れていませんが、『馬場大明神』のことと合わせて、この庚申塔のことを再び報告できればと考えています。